慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三角の具象画 : 一然と『三国遺事』纂述の背景について
Sub Title	The concreteness of triangularity : an essay of Ichinen and the background of compliation of Sankokuiji
Author	高, 雲基(Ko, Woon-Kee)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2000
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション No.25 (2000. 11) ,p.49- 61
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20001130-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三角の具象画

―― 一然と『三国遺事』纂述の背景について――

高　雲　基

1

あきらかに，『三国遺事』は机上の仕事ではない。そこに集められた物語は，その多くが，具体的な現場を持っており，著者はそれを直接踏査した上で書いたという印象を強く受ける。著者である一然（1206～1289）の筆に特に力が入っている個所は，彼の足跡が刻まれた土地である。彼は自分の足で歩き，自分の目で見た土地の口承や記録を集め，遂に一つの叙事詩を作り上げた。それが『三国遺事』である。これについて閔泳珪博士は，

> 一然が収集可能な限りにおける，あらゆる出典をしらみ潰しに調べ上げたことは，『遺事』の内容を一瞥すれば容易に分かる。彼の徹底した実証癖には，我々後学も驚かざるをえない。新羅に関する記事に限って言えば，彼が自分の足で歩き身をもって実験していないところは一個所もない。（「釈 一然 三国遺事」，『韓国の名著』，ソウル：東亜日報社，1969，p. 120）

という。『三国遺事』の話が単純な説話に止まらず，実証的な調査に裏打ちされた事実性も伴っているということである。

一方，『三国遺事』には多くの引用文も見られる。一然が引用する典故については曾て崔南善のなした詳しい解題によってその大綱を知ることができる。がしかし中には今に伝わらないために，典故の確認が難しい場合も多い。ただ，物語の現場は昔のままに今日まで残っていた。

勿論，‘新羅に関する限り’という但書がつく。それは『三国遺事』が新羅中心の仏教文化史という主張と一致する。一然が生まれ，その後の彼の主要な活動舞台となったとこ

ろは，昔新羅の疆域たっだところである。『三国遺事』に伝わる物語の多くがこの地域を舞台としているのは明らかな事実である。しかし，細密な踏査記を得ないて他の地域が相対的にみすぼらしくなる嫌疑をたって指摘するなければ，『三国遺事』の理解は具体的な現場の調査から出発しなければならない。

ここでもう一つ付け加えるべき点がある。特に，『三国遺事』の文学的な性格語る時に著しい点であるが，一然の生涯には常に母という，濃い影を落とす存在があった。9歳の幼い息子を寺へ送り出し，80年あまりの人生を独りで過した母であった。一然にはそういう母が平生の話頭であった。

文学は人情の機微である。本論は一然と彼の母を通じて，論者が『三国遺事』の現場から見り出したいくつかの事実により，『三国遺事』理解の一端緒を呈しようとしたものである。

2

現存する最古の官纂史書である『三国史記』は，金富軾を中心とした官僚たちによって12世紀中盤（1145）に出版された。この本と一然の『三国遺事』の間では，150年あまりの格差がある。しかし実に高麗の歴史でこの150年はこれ以上の大きな隔たりを見せる。

このころ高麗は歴史的に二つの大きな事件を経験した。まずは武臣政権の成立（1170～1274）であり，次に蒙古との戦争（1231～1258）である。

高麗の武臣政権の成立は時期上，また性格上日本の鎌倉幕府の成立と比較されるべきである。高麗王朝が始まる918年からそれまでは，徹底的に文臣官僚中心の政権であった。この時武臣たちが乱を起こし，文臣たちを逐出し政権を取った。これは韓国の歴史上最初の軍事革命であったというのができる。一方，30年あまりにわたって20回以上繰り返えされた蒙古の侵攻は王朝の存立そのものを脅かすものであった。特に武臣の執権中に起った戦争であっただけに，非常に熾熱した戦りとなった。

しかし被害だけがあったのではなかった。対内外的に激変期を過ぎながら高麗社会では中国中心の事大主義が色あせ，かすかながら民族の主体性のようなものが根付くようになる。これは非常に意味深い変化である。

一然は，13世紀の疾風怒濤のような時代を生きた人物である。早く母のもとを離れて僧侶となった彼は，戦争の惨状を目にしながら修業をした。僧侶としての生に対する窮究，悽惨な生活をしいられ続ける民衆に対する憐憫などが，彼をして次第に仏教的な民族主義

者として変化させていった。

『三国遺事』はこのような状況の下で生み出されることができた。

3

慶尚北道慶山で生まれた一然は9歳の時，全羅南道光州の無量寺に就学する。そして14歳の時，僧侶となるため，江原道襄陽の陳田寺に入門する。慶山と光州そして襄陽を繋ぐこの三角形の構図がもつはその意味は大きい。それは一然の生涯だけではなく，『三国遺事』所載の物語の分布とも密接に関聯しているのである。[※写真1及び地図参照]

一方，一然の碑文には，“ここで（江原道襄陽—筆者注）方々の寺刹を回りながら修業するが，その名声が高かった。同輩たちは九山四選の長になるだろうと言った”とある。この寺刹の中に洛山寺が入っていたことは推測するに難しくないである。東海岸の由緒深い観音寺刹である洛山寺と一然の居処である陳田寺は，すぐ隣に位置している。[※写真2，3，4参照]

ここで『三国遺事』の物語の中から一つを紹介する。巻第三塔像第四の「洛山二大聖観音正趣調信」（以下「洛山二大聖」と略称）条である。この話は，一然の生涯と『三国遺事』の記述方法をよく見せてくれる。

「洛山二大聖」条には次のような三つの話が載っている。

① 観音真身との出会い。義湘は海邊で観音真身に出会い，彼の指定した土地に洛山寺を建てた。その後，元暁もその地を訪れ，真身に出会う。

② 正趣菩薩との出会い。梵日は中国に留学していた時，同じ村（溟州の付近にある）から来たという，ある沙弥僧に出会う。そして彼から，故郷に帰ったら自分の家を訪ねてほしいと言われる。片方の耳の切り落とされたその少年は，実のところ正趣菩薩であった。

③ 調信の夢の話。地方官吏として赴任していた調信は，現世の虚しい夢に惑わされていた。しかし，やがてその虚無さを悟り，浄土信仰に精進するようになる。

三つの話の舞台はすべて洛山寺である。一然は，陳田寺にいる間（14歳～22歳），この話を聞いていたが，これは僧侶として彼の生涯に大きな影響を及ぼしたものと見られる。『三国遺事』のいろいろ物語は，このような方式で収集され，そして記録されった。

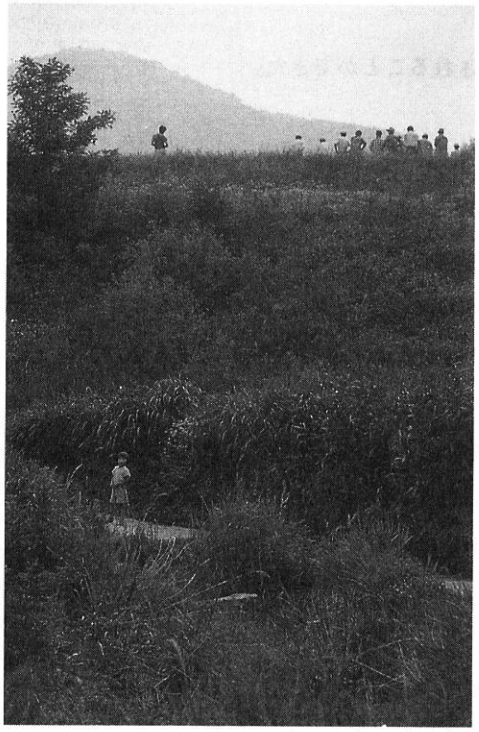


写真1　一然の誕生地である慶尚北道慶山郡押梁面の三聖山。三聖山は元暁，元暁の息子である薛聡，一然の生まれたところだと伝えられていてつけられた名前である。写真の後ろのほうのかすかに見える山が三聖山である。（写真は全て梁真氏の提供である。）

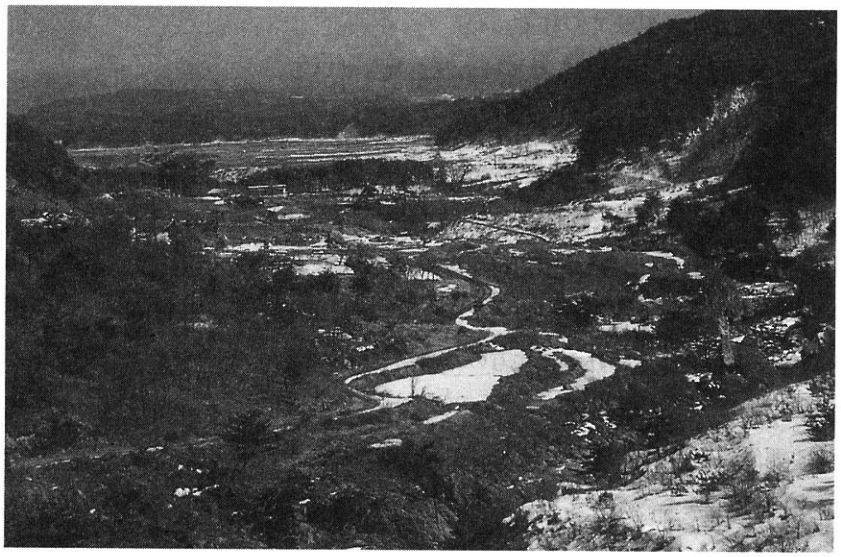


写真2　江原道襄陽郡の陳田寺の遺跡地。一然が14歳の時，この寺で僧侶になって，22歳の時までの青少年期をここで過ごした。雪嶽山の大青峰から東海のほうへ流れ下る稜線にある。遠く海が見えて，写真の左側の上端の低い山に現れている白い点は洛山ビーチホテルである。すぐそばに洛山寺がある。

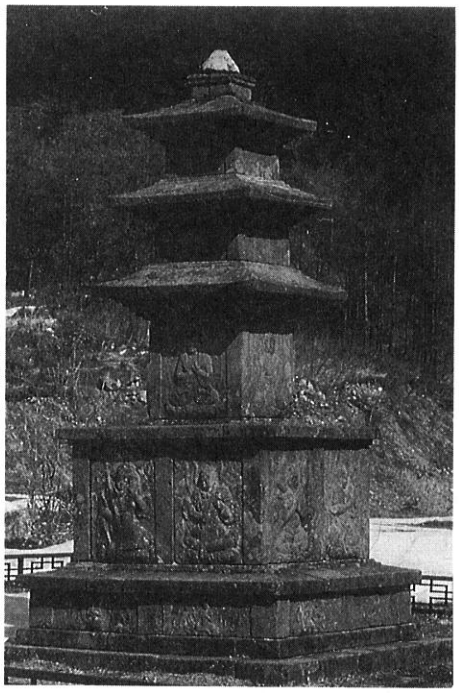


写真３　陳田寺の遺跡地に唯一の残っている三層石塔。国宝である。

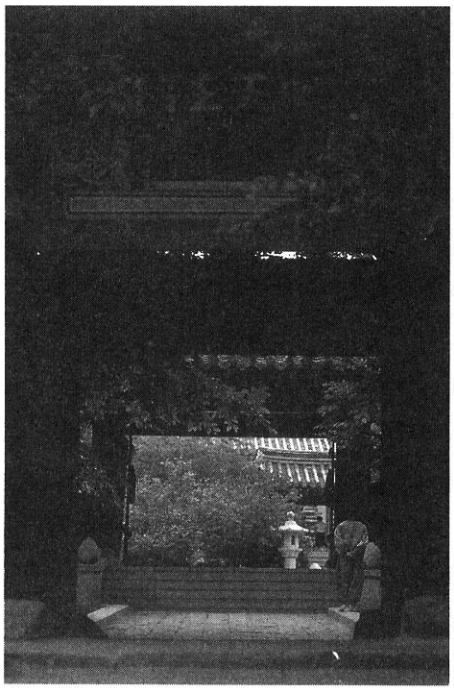
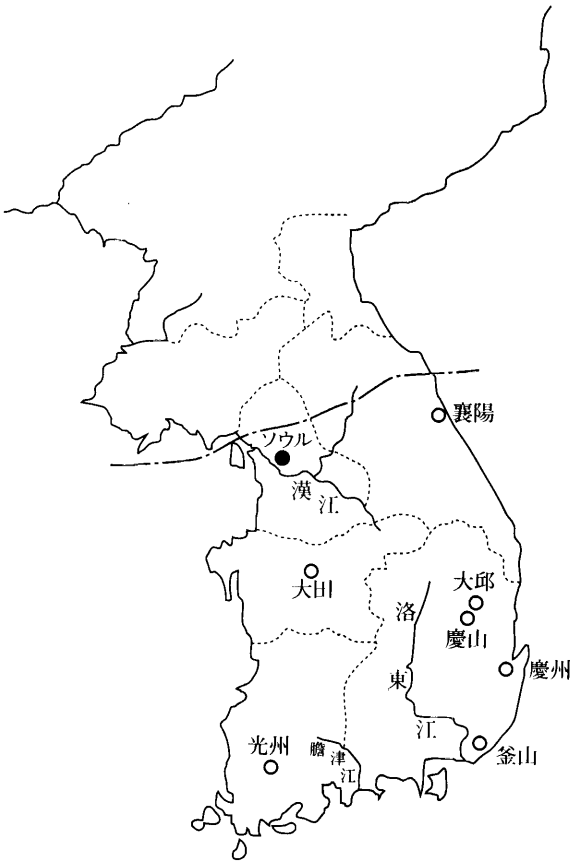


写真４　洛山寺。義湘が観音菩薩を直接会った後作ったために観音寺刹と呼ばれている。非常にこじんまりした雰囲気を漂わす美しい寺である。

[参考地図]



4

「洛山二大聖」条では，一然の生涯に関聯して正趣菩薩の話が特に注目される。その内容は次のようである。

① 梵日がまだ中国に留学している時，左の耳を切り落とされた，ある沙弥僧に会う。沙弥僧は自分を同郷人だと言い，帰国したら自分の家を訪ねてくれるよう頼んだ。(梵日，大和年中，入唐到明州開国寺。有一沙弥截左耳，在衆僧之末，与師言曰："吾亦郷人也。家在溟州界翼嶺県徳耆坊，師他日，若還本国，須成吾舎。")

② 梵日が帰国して9年後，彼の夢に沙弥僧が出てきて，自分との約束を果たしてくれなかったことを恨んだ。彼は急いで沙弥僧の教えてくれた翼嶺の近くにある村に

行き，一人の女に会う。（夜夢昔所見沙弥，到窓下曰："昔在明州開国寺，与師有約。既蒙見諾，何其晩也？"祖師驚覚，押数十人，到翼嶺境，尋訪其居。有一女居洛山下村，問其名，曰徳耆。）

③ その女には息子がいたが，その子は金色童子と一緒に遊んでいると言う。（女有一子，年才八歳。常出遊於村南石橋邊，告其母曰："吾所与遊者，有金色童子。"母以告于師。）

④ 梵日が行って見たところ，左の耳を切り落とされた石仏があったが，それは正趣菩薩の像であった。そこで彼は，以前会った沙弥僧が，他ならぬ正趣菩薩であった事実を悟る。（師驚喜，与其子尋所遊橋下，水中一石仏。舁出之，截左耳，類前所見沙弥。即正趣菩薩之像也。）

梵日（810～889）は新羅末期の僧侶である。中国に受学して文聖王8年（846）に帰って，江原道溟州の堀山寺に入り，新羅の九山禅門の一つである堵堀山門を開創した。文聖王12年（850），彼の年41歳の時であった。

ところで，梵日が会った翼嶺に住む女とその息子とは何者か。女は梵日が中国で会った沙弥僧の母なのか。女が独りで育てる息子は沙弥僧の現身なのか。女の息子が川邊で金色に光る子供と遊んでいたというが，その二人の関係はどのように考えたらいいか。また前身と現身として考えていいのだろうか。それならば，沙弥僧は梵日に，自分の前身と現身を一度に示したのであろうか。

結論から言えば，梵日は中国で修業しながら少年沙弥僧として現身する正趣菩薩に会ったのだが，その時はこれに分なかった。しかし故国に帰って沙弥僧が教えてくれた翼嶺を訪ずね，そこではじめて正趣菩薩であることを確認した。

梵日が正趣菩薩に出会うまでの話からは，実に，一然の新羅仏教に対して持っていた，強い主体性をうかがい知ることができる。中国に修業していた時に出会った聖人を，聖人として知り得たのは，故国に帰ってきてからであった。一般に『三国遺事』における'聖人との出会い'は，得悟の確証を意味する。

5

この記録に遭遇し，したためた一然の意中にあったものは何か。10代の後半，まだ感受性の鋭い青少年の時期にあった一然は，ある日，隣の洛山寺に伝わるこの話を聞いたの

である。この時，一然は昔の僧が聖人をどのようしてに会うかを考えるに止まらなかったようである。彼の脳裏をにわかに故郷のことがよぎり，9歳の時に離れた故郷の山河が目の前に浮かんだ。そしてやがて母の顔が現れ，せつない懐かしさに身震いしたのである。異国の地で出会った故国の僧侶に懇切に頼み，無心な僧の夢にまで出てきた，片耳の切り落とされた少年沙弥僧と，彼を待っていた母。少年一然はそこに自分と自分の母の顔を重ねていたのではないだろうか。

正趣菩薩は洛山寺に安置されった。そして，その伝承過程を一然は詳しく‘洛山二大聖’条の最後の部分に載せておいた。

一然が下山を決したのは，国師に冊封された忠烈王9年（1283）の春が過ごいて，正にその年，すなわち彼の年78歳になっている秋であった。下山先は碑文に‘旧山’とある。下山の理由は母を世話するためだったという。一然と母の年齢差は19，20歳にもならない若さで息子一人を生み，77年を独りで生きた母である。母は翌年になくなった。一然は麟角寺に居処を移す。[※写真5，6参照]

一然に孝心は信仰そのものであった。一然の碑文にも，“母を思う気持ちがあまりにも切実で，睦州陳尊宿の遺風を慕って自らも睦庵と号するほどであった”という文がある。陳尊宿は黄蘗の首弟子として声名が高かったが，末年に故郷の睦州に隠居し，母を奉養した。夜なべしてせせと草鞋を作り，それで食べ物を拵えて母の面倒を見た。母が亡くなった後は，人目を忍んで通りの木の枝に草鞋を引っ掛けておき，道行く人たちに使わせたのである。

一然が描いてみる人生の真景がそこにある。それは『三国遺事』の面面を装飾している模様でもある。

6

一然は，7世紀ころ新羅の僧元暁と同郷人であった。彼は元暁を誰よりもよく知っていたのみならず，彼に対して大きな愛情を持っていた。そして誰も知らない元暁の逸話を自信を持って話すことができた。元暁の伝記である巻第三義解第五の「元暁不羈」条に書かれた，“彼の仏法について学んだ始末や，布教における盛んな業跡などは，唐の僧伝と行状に詳く載っているから，ここには記録さない。ただ郷伝にある一二の異事を記すことにする”（其遊方始末，弘通茂跡，具載唐伝与行状，不可具載。唯郷伝所記，唯一二段異事）と言ったのは，そのような自信感の表われである。

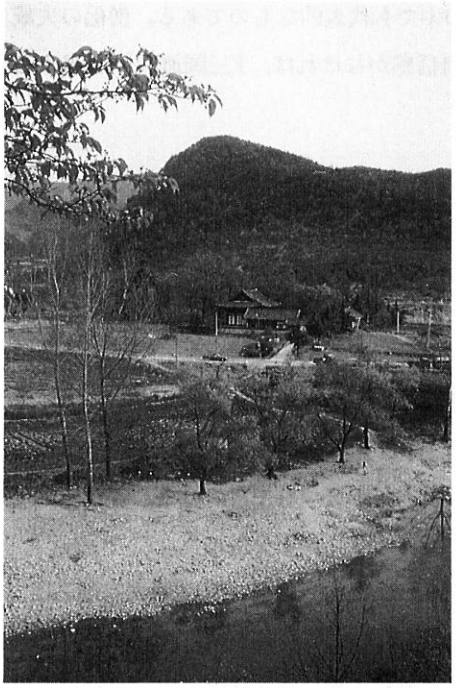


写真5　慶尚北道軍威郡の麟角寺。一然は79歳の時にこの寺に入って84歳の歳で亡くなった。『三国遺事』を完成させたところとして知られている。

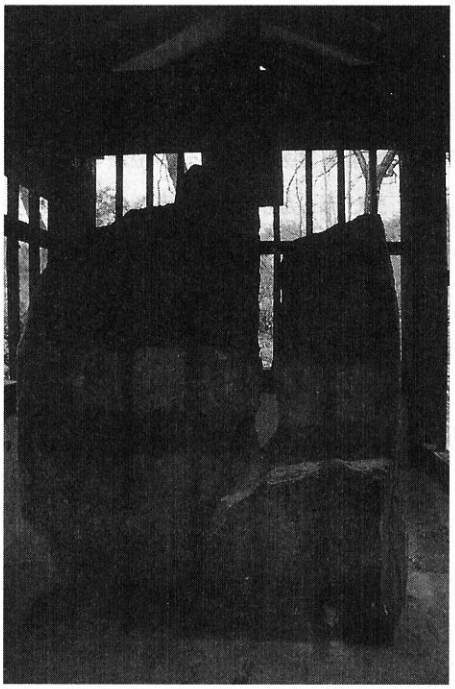


写真6　一然碑は激しく毀損して，この程度しか残っていない。

元暁と瑤石公主の間にあったロマンスは，その中でも代表的なものである。僧侶の失戒を取り扱うこの事件こそ，一然の元暁に対する自信感がなければ，『三国遺事』に書くことができなかったのだ。[※写真7，8参照]

師がかつてある日，風顚して，街のなかでこんな歌を歌った。“誰が柄のない斧を貸してくれないか。天を支えるような柱を斫るのだが。”人びとは，みな意味が分らなかった。ときに太宗がこれを聞き，“この師は貴婦人を得て賢い子を生もうとしている。国に大賢がいれば，その利益は莫大なものであろう”と言った。当時，瑤石宮にやもめの王女がいた。王は役人に，元暁を探し出し，宮につれて行くように命じた。役人が勅命を受けて探すと，すでに南山から下りて来て，蚊川橋を通る途中で出会った。師が佯って水に下り，着物を濡らすと，役人が師をつれて宮に行き，着物を替えて乾かし，そのまま留めた。王女ははたして身ごもり，薛聡を生んだ。

（師嘗一日，風顚唱街云：“誰許没柯斧，我斫支天柱。”人皆未喩，時太宗聞之曰：“此師殆欲得貴婦，産賢者之謂爾。国有大賢，利莫大焉。”時瑤石宮，有寡公主。勅宮吏，覓暁引入宮。吏奉勅将求之，已自南山来，過蚊川橋，遇之佯堕水中，湿衣袴。吏引師於宮，褫衣曬晾，因留宿焉。公主果有娠，生薛聡。）

果然，薛聡は新羅十賢の中で一人になった。しかしそれに終わらなかった。元暁は，失戒になったと思って，平民の服に着替えって民衆へ仏教を伝播した。偶然に芝居の役者たちが弄ぶ大きな瓢のお面を手にいれてみると，その形が怪異であった。その型どおりにまねて遊び道具を作り，『華厳経』の，“あらゆるものにこだわらない者は，直ちに生死から脱け出られる”という句を取って「無碍」と命名し，歌も作って世間にひろめた。新羅の，いや韓国の民衆仏教が始まった瞬間である。

一然もかなり次のようにこの部分を感激的に繰っている。

あるときこの戯具をもって，多くの村や里お歩きまわりながら歌い舞って，仏教を弘め，帰ってきた。農家と田舎の猿のような者たちをして，みな仏の名を知り，南無阿弥陀仏を念ずるようにさせたのは，実に元暁の法化の力によるものであった。

（嘗持此，千村万落，且歌且舞，化詠而帰，使桑枢瓮牖玃猴之輩，皆識仏陀之号，咸作南無之称，暁之化大矣哉。）

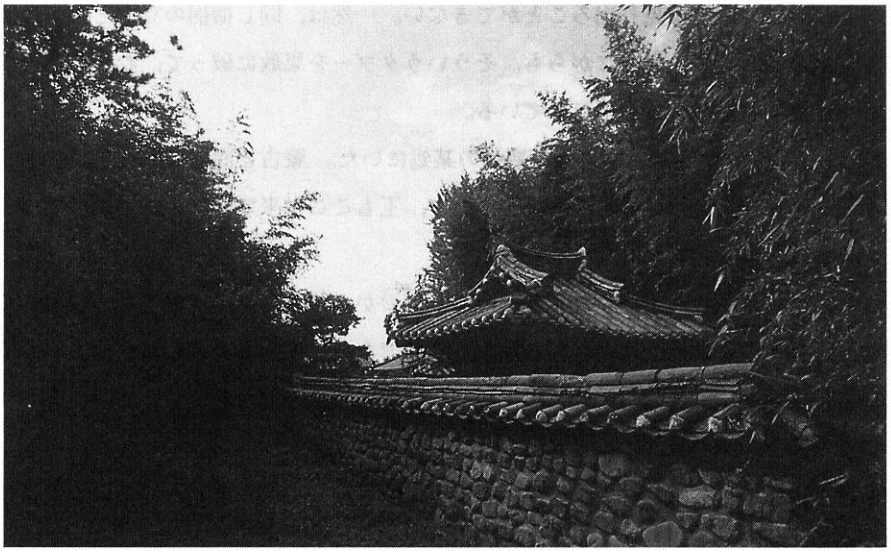


写真７　慶州の郷校。この場所が新羅時代では瑤石宮であった。元暁と瑤石王女が会ったところである。

写真８　夕暮れの蚊川。瑤石宮の隣を流れるのに，元暁はこの川を渡ってくるときにわざと水の中に落ちる。瑤石宮の役人が出て水にぬれた服を乾かしてから行きなさいと言って，元暁を自然に瑤石宮の中に引き入れる。

この記事は他の本では見り出ろことができない。一然は，同じ僧侶の立場としては触れにくい失戒のことを取り扱いながらも，そういうタブーを果敢に破って，むしろ布教の拡大という積極的な意味合りを附与している。

一然は，75歳の時，瑤石宮に近い慶州の某処にいた。蒙古と高麗の聯合軍が日本遠征に出る時であった。慶州に行在所が設置されて，王もここに来ていたが，一然は王の近しで仕えるように命じられた。

昏迷した時代の中で一然が見たものは何だったのか。彼は慶州の空の下で，以前ここが燦爛に，かつ平和に仏教文化の花開かせたところであったことを実感しながら，そして民衆に仏教の旨趣を伝えた元暁の姿を思い起し，理想の社会とは何かについて問いをかけたのではなかろうか。

本を書く上には，文献だけでなく，現場で実体験を通して得た資料も，やはり貴重になるのである。

7

12世紀から東アジアの状況には大きな変化が起こっていた。中国では蒙古族による元が立ち，日本では鎌倉幕府が，韓国では武臣政権が成立した。いずれも自らの歴史に初めの事件であった。

世界の変化に当代の知識人たちはどのように対処したのであろうか。韓国にの『三国遺事』はそのような質問に答えてくれる。著者は僧侶として社会の下層部から上層部までを接しながら全国を歩き回り，多くの経験をした。蒙古との戦争と降伏，日本遠征によって払わされた犠牲，それらは民衆の生活をどん底に陥れた。どん底に落とされた時代は，徹底した自己省察によってしか立ち上げることができない。一然をして『三国遺事』を書かしめたのは，他ならずこの自己省察であった。

そして母。江原道襄陽の陳田寺を調査しながら，「洛山二大聖」条の裏面に隠された雰囲気とメッセージを，彼の母と関係つけて考えて見た。修業のために歩いた故郷の慶山から光州への道，僧侶になるために歩いた光州から襄陽にまでの道。長い旅路のなかで少年の心には，故郷に置いてきた母の姿がいつまでも消えずにいたのであろう。

慶山-光州-襄陽は一つの三角形となる。ところが『三国遺事』で重要とされる記事の現場は，この三角形の内外に位置するのである。そしてこれはさらに母と時代と歴史の三角形となる。私はこれを『三国遺事』撰述の原理と考え，今仮に「三角の具象画」と名づけ

る。

参考文献

『三国遺事』，李東歓 校勘（ソウル，民族文化推進会，1973）
『三国史記』，金貞培 校勘（ソウル，民族文化推進会，1973）
『三国遺事引得』，金容沃 編（ソウル，トンナム社，1990）
『一然碑文集』（ソウル，中央僧伽大学，1993）
申東旭（外），『三国遺事の文芸的価値の解明』（ソウル，セムン社，1982）
洪允植（外），『三国遺事の研究』（ソウル，中央出版，1982）
精神文化研究院（編），『三国遺事の綜合的研究』（城南，韓国精神文化研究院，1986）
仏教史学研究所（編），『三国遺事研究論著目録』（ソウル，中央僧伽大学，1992）
金英泰，『三国遺事の新羅仏教思想研究』（ソウル，新興出版社，1979）
趙東一，『三国時代説話の意解く』（ソウル，集文堂，1990）
蔡尚植，『高麗後期仏教史研究』（ソウル，一潮閣，1990）
宋孝燮，『三国遺事説話の記号学的研究』（ソウル，一潮閣，1992）
閔泳珪，『四川講壇』（ソウル，又伴，1994）
———，『江華学その最後の光景』（ソウル，又伴，1994）
高雲基，「一然の世界認識と詩文学研究」（ソウル，延世大学博士論文，1994）
———，『一然』（ソウル，ハンギル社，1997）
丁天求，「三国遺事と中日伝記文学の比較研究」（ソウル，ソウル大学博士論文，2000）